

八百屋  
於七 浮名の額面

特42

864





煮路跡見づよ不了問程  
 何人の異  
 煮路跡見づよ不了問程  
 久兵衛  
 跡未の年  
 白屋か  
 婦人煮  
 から火  
 浮名  
 其由  
 萬

妻と夫とも今年八才ありけりか七とありて  
 答るる花のいそ二人の娘ありし  
 久兵衛の再後  
 妻と嫁らむかを成長  
 の後と老  
 追分不其名も  
 娘が成長を待ふ附一日千秋の思ひ  
 の言物と管へ  
 今年八才ありけりか七とありし



田栄  
 出

物讀  
 業と學  
 松竹梅の席書と一面額  
 松竹梅の席書と一面額  
 松竹梅の席書と一面額  
 松竹梅の席書と一面額

鬼不角路跡先見つよ不了回程

妻と夫とも今年八女ありけり

何人の真

可夫意も者

身もも者

好男子

可也も宜る

夫婦人煮の奴

自から火宅

長く浮名

百屋か七が其由来

頃八元録木の年

百屋久兵衛と

答めり花のよき一人の娘

又六女

妻を嫁

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘

今年八女ありけり

娘が成長

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘



家富栄

暮せしが

己辛

お進

お進

お進

お進

お進

お進

お進

お進

お進

お進



元来賢い性

皆熱心

手本と送り

の号も

本も

ふと

小出来

けい

物讀

業と学

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘

の娘

今物の

あはれと知る

十六宵の春あられ

次女中と云ふ

羨しく遠山の櫻

雪の肌へ細く

能聲をね

未心ふ奇ひ

似合一者の

あらざる

故本意無

月日と



美男あてと云ふ

しる見まほしく

其性至て柔和は

一山の僧徒木彼を愛

と者多しと云ふ又引替

てとも思ひがなる鎌倉

文弥と

ゆゑ

これゆ

又方丈

小性な

己が其性

送りし時

一日のふ

あん北風

働き時

ふらん状

本々の退分

より出火

忽ち燃

上り殊の

火矢と云

合む甚

立退り



吉三

ふ異

の生

實心ろ

荒々

敷まの

みら

ど

色好

あま前きん野の

小娘と云ふ

文弥がう

今物の

あはれと知る

十六宵の春あれば

次女ゆえふ

羨く遠山の櫻

雪の肌へ細くもまゝ親久空へ見ろふ附

能智かねと向んと東西と頼みよと

未心ふ可ひたる

似合一者の

あらざる

故本意無

月日と



美男あて女子ふ

その見まじく

其性至て柔和はて

一山の僧徒木彼愛

と有る多し又引替

へても悪くはる鎌倉

久弥と

ゆめて

これか

又方丈

小性み

已に其性



送り時

一日のこふ

なん北風

働一き時

本々の退分

より出火

忽ち燃



召置かす守音即

とる小性あはれ生得

もの

吉三

異

生

實心ろ

荒々

敷まの

ふら

を

色好

ふら前きん西の

小娘をさすけり

文弥がうり同

上り殊の外あつた火とありて既ふ八百屋久共エり

火夫とあはれが辺りへ立退家后あはれ先取り

合を菩提所あはれ我且那寺駒込の吉祥寺と

立退りり爰ふ又此吉祥寺の長老が膝元迎へ





明がく今詮方も  
 頼り伴は我家へ  
 と寐覚の床の  
 吉三が

火附  
 以頂世

彼家路を走らして  
 半途で私の引さるひ  
 日頃の思ひ  
 と暗ん  
 と己を  
 早くも  
 謀得て  
 退分道

お見のうらまへ吉三お  
 おんまへとくちと誠

お説論をばおと大ひおと



木戸へ  
 取置重お

天ひて

お説論をばおと大ひおと  
 おんまへとくちと誠  
 家へ我家を救出つ町役人  
 が守り居前ある揃お  
 鉤有一太鞍お信と目  
 と附つ今

どの  
 文跡  
 どの  
 若り

おんまへとくちと誠



明く今詮方

是非の親お伴は我家へ

そん床のしと寐覚の床の

らくもまろ三が

面影さきり

伏屋おさる

そまのあ

見へ逢ひ以頂世

の豊豆多ら火附

盗賊多

か守

てま

彼お家路を走ら

半途で我の引さ

日頃の思ひ

と暗え

と己を

早くも

謀得て

退分道

の八百屋

小里のふ

小思

ちま



町の諸方の木戸へ

黄谷のりく取最重

吉二入

炭の使

序

鎌倉

文弥

元

是冠

是冠

是冠

乘

小説論

お守り

お守り

お守り

お守り

お守り

お守り

お守り

お守り

お守り

お守り

お守り

お守り







必八の頃より年号月日とて今今年十交ふ  
 及ふ罪の經重不評定ありて火あがり不行ふ  
 ぶと大森の駄不引と既系危く見けり  
 此度東照宮様百田御年忌不附  
 大赦仰せりて高らう小讀上より以時  
 免まふと高らう小讀上より以時  
 か七が親の久兵衛が一世の名義とてか七が跡よ  
 ろふと以助命と聞ゆりゆめあまを  
 心ちして三拜九拜はか七が伴ひて我家の  
 こころ床りたり爰不又鎌文弥の年頃の  
 積悪とあり



ちの子供数多ありて子孫繁昌  
 大あふ  
 とげ  
 則ちるふ  
 駒込圓淨寺  
 の人の知る  
 とあり



か七  
 大鞆  
 せ打  
 せ上  
 勤乱世に其罪控からひて火あがり不も行ふ  
 野こも又大赦不ありて所拂ふありけり候ふこと  
 見へり去の其後八百久兵衛の仲人を立て小守  
 吉三郎とて受娘とて替礼を取り結ばせ  
 養子とほ其此の衆隠居とあり又か七吉三郎が

目出

明治十二年五月十日御届

東京淺草區駒形町甲三番地

編輯者

大橋堂

出板人

見玉又七

